

NIAES 国際シンポジウム

「モンスーンアジア農業生態系における侵略的外来生物の実態と制御」

農業環境技術研究所は2007年10月22日～24日、国際シンポジウム「モンスーンアジア農業生態系における侵略的外来生物の実態と制御」をつくばで開催し、口頭発表（17題）およびポスター発表（24題）を行い参加者9カ国110名の間で情報を共有化するとともに、構築中のアジア・太平洋外来生物データベース（APASD）の充実と利便性の改善に役立てました。

基調講演では、米国コネチカット大学のシランダー教授は「侵略生物の拡大・分散予測における国際協力の重要性」について外来植物の研究例や市民参加型の調査をもとに報告しました。次いでマレーシア大のバカル教授は同国には500種の雑草が記録され多くは外来種であること、それらの研究と実態について報告しました。南京農業大学の強助教授は中国の315種の外来種の実態と対策、とくにセイタカアワダチソウの由来について報告しました。タイ農業部のツンソンチボルン研究員は熱帯アジアにおける外来植物の現状と研究の紹介、当所の藤井上席研究員は外来植物のリスクアセスメントと制御の紹介、楠本主任研究員は農村環境調査情報システムの侵略的外来植物調査への応用について、報告しました。さらに英国のプリムス大学オーエン研究員は同国におけるアジアからの外来植物ハウセンカの蔓延状況などを報告しました。

中山大学張教授の報告によると、中国では1990年以降は侵入生物の監視体制が整備され、侵入後1年以内の早期発見が可能になっています。これまでに侵略的外来害虫として29科9目50種が重要種に指定され、ゾウムシなど鞘翅目が最多で18種（36.7%）、次いで同翅類（8種）で、特にハモグリバエ、カイガラムシ、ヒアリ、センチュウ、コナジラミ、ミバエなどを警戒しています。この数年外来生物の影響・リスク評価、拡大予測、検疫、監視体制、早期発見、根絶などの事業や研究に国を挙げて取り組んでいることが報告されました。

国際農林水産業研究センターの中村研究員は東南アジアのココヤシの害虫キムネクロナガハムシについてタイ農業部との共同研究でヒメコバチ科寄生蜂による生物的防除のプロジェクトに取り組んでいることを報告しました。

九州大学の上野助教授によると、1982年に福岡県と沖縄県で発生が確認され、関東まで分布拡大しアルファルファやレンゲに壊滅的な被害を与えているアルファルファタコゾウムシについて、生物的防除のために1980年代にアメリカからヨーロッパトビチビ

アメバチを導入し1990年代に野外に放蜂した結果、10年を経て定着し始め2002年から寄生率が高まり2004年は40%台の寄生率、そして被害は20%未満に収まりました。

台湾動植物検疫所郭所長の報告では、南米産で1930年代にアメリカ南部に侵入したヒアリは2003年10月に台湾で初発見されました。台湾では「紅火蟻（アカヒアリ）」と呼ばれています。現在台北県と中部の嘉義県を中心に発生し、今年5月現在で台北県の5市町村と嘉義県の2村、台北県の南西隣にある桃園県の12市町村に定着しました。台湾政府は2004年11月に台北市内にヒアリの防除を目的とした国家紅火蟻防除センターを設置し、ヒアリに関する情報収集や相談を受けるとともに防除対策を講じています。現在台北では90%、嘉義では99%の防除効果を上げています。なお2003年後半には広東省、2005年1月には香港、マカオ、華南、フィリピンに発生。日本では南西諸島への侵入を警戒しています。

貝類について当所の伊藤主任研究員はカワヒバリガイの分布状況を報告しました。フィリピン稲研究所（Phil Rice）のジョーシ研究員と九州沖縄農業研究センターの和田上席研究員は、世界の外来生物ワースト100種にリストアップされているスクミリンゴガイについて近年西日本、韓国、フィリピンの有機稲作あるいは慣行稲作で除草に活用され、アヒルやコイの除草効果よりも高いと報告しました。

総合討論では、研究者のみによる調査には限界があるので市民（科学者）と連携協力すること、また侵入植物の生態学的制御、侵入小動物の除草への活用などの研究と、それらのデータベースの充実、情報交換の必要性、とくに外来生物の多くの発生源である南米諸国の研究者を交えた討論会や今後の国際共同研究などについて意見交換をしました。

最終日の24日には筑波山周辺の農業地帯を視察するとともに外来生物の観察会を行い、参加者の評判は上々でした。



（生物多様性研究領域長 平井 一男）